土屋 聡（中国文学）

六朝寒門文人鮑照の研究

我が国における中国六朝時代の詩文研究は、まず斯波六郎、吉川幸次郎らによって近代の科学的実証的な研究手法が導入され、その基礎が築かれた。やがて、作家でもある高橋和巳の登場によって、目前に残された作品の解釈だけにとどまらず、各詩人の個性を見極め、その時代を生き抜いた一個の人間としてのあり方を深く追究しようとする研究視点が開発された。この高橋の研究は、中国文学研究の多くの後進を刺戟し、それ以前には指摘されることの無かったさまざま事実が判明し、また幾つかの個性的な詩人の再発見にも繋がった。しかしその後、この時代の更に具体的な状況が、宮崎市定、川勝義雄など主に歴史学の卓越した研究によって解明されるに及び、文学研究においても、多くの修正が求められるようになってきた。現在の六朝文学研究は、この歴史学の成果を取り入れ、かつ「文選学」と称せられる極めて高い精度が要求される文章解釈学の上に立ち、まさに百尺竿頭に一歩を進めるが如く展開されていると言ってよい。

本論文は、如上の学界動向を踏まえた上で、六朝中期の重要な詩人の一人である鮑照（414?～466）を中心に、彼の文学創作のあり方を考究したものである。就中、彼について従来しばしば習慣的に用いられてきた「寒門文人」という呼称をめぐっては、これをさまざまな角度から考察し、幾つかの新発見に至っている。なお、詩人鮑照に焦点を定め、この人物の名を標題に冠した研究書は、いまだ日本では公刊されておらず、本論文は、まことに画期的な研究業績と言えるものである。

本論文は、序論・結論を含む九章で構成される。まず上篇に列する三章では、鮑照登場以前の後漢から六朝前半期の文学のありようについての考察が展開されている。特に第一章では、その文学の解明に「鏡銘」という考古資料を活用し、後漢の無名詩人たちが、その創作活動においてどのような社会的立場にあったかを読み解こうとしている。新資料の活用による新解釈の提出は、本論文の随処に見えるものであるが、この後漢の名作についての論述は、本論文の秀抜な研究姿勢を示す一例となっている。中篇の二つの章は、いよいよ鮑照本人の作品についての研究である。その第一章では歌謡文学である楽府（がふ）作品について、第二章では後世の近体詩の濫觴ともなる五言八句詩の連作について、その成立過程を探っている。以上により、本論文では、鮑照の文学創作と、彼より約二百年前を遡る六朝初期の文学とその時代状況との関係が丹念に考察されている。なお、中篇および上篇第三章から生起する問題として、六朝貴族社会の所謂「文学サロン」と、その枠組みの中での鮑照の立場が実際にどのようなものであったかが指摘されているが、そのことへの回答は、下篇の二つの章に用意されている。

さて、本論文の注目すべき見解の一つに、鮑照の作品の幾つかには彼が近侍した主人劉義慶（403～444）を主語として読まなければ解釈できないものがあることを発見した点が挙げられる。しかも本論文の筆者は、まことに慧眼にも、詩歌作品のみならず「蕪城賦」という鮑照を代表する堂々の長篇にも主人劉義慶との密接な関係が伏在することを突き止め、従来の説とは全く異なる解釈と、年代の推定を行っている。しかも、その論証には十分な説得力がある。

このように、本論文は、中国六朝時代の文学のありようを、鮑照という典型的な人物の活動を通して明らかにしたものであり、多くの新見解に富む優れた研究業績と言える。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力をもつことを認めるものである。